

## 佐渡の貴重な植物群落. 15

## 佐渡 田切須のヤブツバキ林

伊藤邦男

## 1. 田切須のヤブツバキ林

(1) 位置 佐渡郡真野町田切須 臼杵ミツ家の屋敷林  
(すぐれたヤブツバキ林)

## (2) 生態

ヤブツバキ *Camellia Japonica* (ツバキ科) は、タブ、シイ、カシなどとともに暖帯林の主要樹である。関東以西の暖帯を主な分布域とし、海岸沿いに北上し、その北限は青森の夏泊半島である。

ヤブツバキは暖地系常緑高木林のタブ、シイ、カシ林の亜高木層林として優占、群生する。和名ヤブツバキは藪(やぶ) 状に群生する生態による。佐渡の平地の気温は年平均13°Cで暖帯気候である。冬の季節風に直面しない段丘はヤブツバキ域で、海岸より内陸にかけて、タブ-ヤブツバキ林→スダジイ-ヤブツバキ林→カシ(ウラジロガシ・アカガシ) -ヤブツバキ林と生態分布する。

「田切須(たぎりす)のヤブツバキ林」は、真野湾沿いの段丘上、海拔120m、海岸より900mに位置する。この地

域は、佐渡のアカガシ林域で、臼杵家の屋敷林は、アカガシ-ヤブツバキ林である。高木層は、高さ15m、胸高幹径20-40cm位のアカガシがみられ、タブ、カラスザンショウも混生する。亜高木層は高さ 81-0m のヤブツバキが群生する。一見してヤブツバキの純林とみられるが、アカガシの混じるヤブツバキ林である。ヤブツバキの年輪成長は1年当たり1mm と推定されるが、ヤブツバキの幹径は10-20cmで、推定樹齢は 100-200 年となる。この林は東西40m、南北100m、面積40アール。300余株のヤブツバキが群生し、県内一の規模の大きい林である。臼杵ミツ家の昔からの屋敷林で、ヤブツバキの実の採取林として守り育てたものである。佐渡はツバキの実・ツバキ油の産地。昭和30年頃までの実の仲買人がいて、多い時には年間米俵にして 400俵から 500俵が小木港から新潟や長岡の製油所に送られていた。原植生はアカガシ-ヤブツバキ林。その自然林を、樫の実採取林として、ヤブツバキ林として育てた林で、学術上、民俗上、貴重な林である。

## (3) 植生

## 田切須のヤブツバキ林

環境	屋敷林(40×100m <sup>2</sup> )・方位・傾斜 0		海拔120m	調査面積15×15m <sup>2</sup>	
階層	優占種	高さ	植被率	胸径	種数
高木層(B <sub>1</sub> )	アカガシ	15m	40%	21-38cm	3種
亜高木層(B <sub>2</sub> )	ヤブツバキ	81-0m	70%	7-23cm	1種
低木層(S)	シロダモ	4m	30%	-	6種
草本層(K)	ヒメアオキ	0.5m	40%	-	37種
組成(B <sub>1</sub> )	アカガシ2・1	タブ1・1	カラスザンショウ 1・1		
(B <sub>2</sub> )	ヤブツバキ4・4				
(S)	シロダモ2・2	ヤブツバキ2・2	スダジイ1・1	キツタ+2	タブ+ ヤツデ+
(K)	ヒメアオキ2・3	ツタウルシ1・2	シロダモ1・2	ナガバジャノヒゲ1・2	チゴユリ1・2
				ウラシマソウ1・2	シソ科1・2
				キツタ+2	ホクロクトウヒレン+2
				ケヤキ+2	ノブドウ+2
				ウマノミツバ+2	ホウ
				チャクソウ+2	オモト+2
				コシノホンモンジスゲ+2	ヤブコウジ+
				シオデ+	タラノキ+
				オオバク	ロモジ+
				マルバアオダモ+	ムラサキシキブ+
				ハリギリ+	タブ+
				フジ+	タチツボスミレ+
				ツル	グミ+
				ミツバアケビ+	コバノカモメズル+
				サルトリイバラ+	ヤブツバキ+
				サンショウ+	エゾ
				イタヤ+	アカガシ+
				ヒサカキ+	コウライテンナンショウ+
				マサキ+	チヂミザサ+

#### (4) 保護の現状

小佐渡県立自然公園地域内である「田切須のヤブツバキ林」(1988)として、真野町の天然記念物に指定されている。「西三川のヤブツバキ林」(1978)として、新潟県の特定(重要)植物群落に、「新潟のすぐれた自然」に、貴重植物群落「田切須のヤブツバキ林」(1993)に指定されている。

## II. ヤブツバキの巨木

樹齢 800年にならんとするツバキの大樹がある。

西は真野入江、海より 2km、海拔 165m。西三川段丘が山に接するところにある。真野町田切須字高塚、植村ヒサノ氏所有のツバキである。

ズシリと大きな巨幹。幹は凸出したコブが多い。白く粉を吹いたかと思える白斑が幹を彩る。胸高幹径 75cm。幹周囲 2.1m。この地のツバキの年輪生長は 0.5mm。幹径 75cm は推定樹齢 750年となる。

樹高 9m、傘状の樹幹は四方に広がる。樹幹幅 11m余。樹下はタタミ 30畳敷きの広さ。

「人間の寿命がどれほど長いといっても、八千年を春とし、八千年を秋とする大椿にくらべると、もの数ではない」は、紀元前 4 世紀の哲人、荘周の言葉であるが、八千年はオーバーとしても、この田切須の大椿、衰えは一切みせず生氣あふれ「八百年を春とし、八百年を秋とする大椿」である。

佐渡の羽茂の大石の田屋(屋号)の娘が人魚の肉を食った。いくら年をとっても 17・8 の若い娘のまま、諸国を行脚し八百比丘尼になって佐渡へ帰ってきた。そしてこの八百比丘尼の手にしたのが、赤い椿の小枝だったという。

八百比丘尼によってもたらされたという島の椿。大椿の前にたたずむ。葉は濃緑のつや葉。巨幹の肌はいまもつやつやして不思議な生氣を発散させる。今年もまた、真紅な花をたわわにつける。衰えを知らぬ生命を大椿にみる。突如、この大椿“八百比丘尼”に化するのである。

この大椿のある一帯は小布勢山御林とよばれるかつての佐渡奉行所の直轄林。小布勢神社の御神体はこの山、巨木林立する照葉樹林の森であった。明治初年に伐り出された木はおよそ 3000本、そのうちアカガシは 453本、ツバキ 1120本、アカガシとツバキの原生の林、神います森であった。

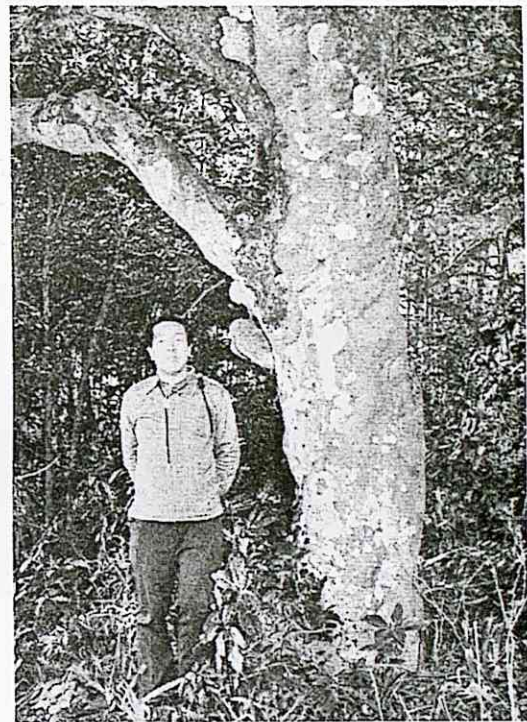
この「植村家のツバキの大樹」も 1本ポツンと単本となっていて生えているのではない。現在は畑をめぐるツバキ並木林のなかの 1本である。

『西三川村史料』にも「この付近は椿林という地名もあり、全村にわたって自然のツバキ林であった。したがって幹回り 8尺~10尺(2.4~3.0m)の巨木も少なくなかつ

た」とのべている。

巨木の島、佐渡。自然風土だけでない。巨木を育てた島である。

名称	ツバキの大樹
指定	無指定(町天然記念物指定相当)
所在地	真野町田切須
内容	ツバキの巨木
樹種	ヤブツバキ(ツバキ科)
樹高	9.5 m
幹周	2.12 m (胸高) 2.70 m (根元)
樹冠幅	南北 11.2 m、東西 11.4 m



田切須の大ツバキ 写真 伊藤邦男

## III. ツバキの民俗

佐渡はツバキの島である。樹齢 800年のツバキの巨木があり、ツバキ林には 400株のツバキが群生する。かつて佐渡は長崎に次ぐ、全国 2位のツバキ油の産地であった。野生のツバキの花にさまざまな変異があり、そのまま「花椿」といって世に出してよい美花が多い。そういった意味でも、ツバキの島である。特に南佐渡には多い。赤泊、西三川、羽茂、小木はすこぶるツバキが多い村である。

椿椿のいくらかもある村かな 塚原天南星

小木町の町の木はツバキ。どうしてツバキなのかと問えば「どこへいっても、いくらでもあるのが椿」と答ががかってきて、まさに天南星の句のとおりである。

花は11月から咲く。寒中にも咲いて 3月、4月は満開なる。

島の沖暖流ながれ冬すでに海の温みにつばき花咲く

土屋比我子

自然の立地がツバキ林を成立させたことは確かである。しかし自然立地だけではない。ツバキ油をしぼるためにツバキの実の採取林として林を育てた長い歴史がある。

赤泊村の村史の編さん室によると、同村にはカヤとツバキの御林が明治初期まで存在した。「御林」は奉行所直轄地の国有林。天保年間（約160年前）の記録によると13ha、6567本の油利用のツバキが植えられていた。小木町柴町の笠木健一さん（大正3年生れ）は昭和30年頃までツバキの実の仲買人であった。多いときは年間米俵にして400俵から500俵扱い、新潟や長岡に送っていたという。昭和30年代より実の採取はすたれ、村々のツバキ林は急激に衰微していく。時代が変わり人々は別の方向に眼をむけた。

佐渡の理科センターの先生方と「佐渡の植物生態・植物民俗調査会」を組織し、小木入りをしたのは昭和56年（1981）であった。『南佐渡小木の植物』（1982）として報告したが、その当時小木岬随一のヤブツバキ林が虫谷にあった。海拔30m、汀線より300mにある東西60m、南北50mのツバキ林で樹齢40-50年の若い林であったが、ツバキは300~400本、林内はうっそうとしたみごとな林であった。5年前（1990）訪れたとき、この林はすっかりなくなっていた。道路拡幅と造成のためという。所有者個人を云々することは一切ないが、現実には確実にツバキの自然林をこの島から岬から消していく。

ツバキはシイ・タブ・カシ林にともなって林の中木層

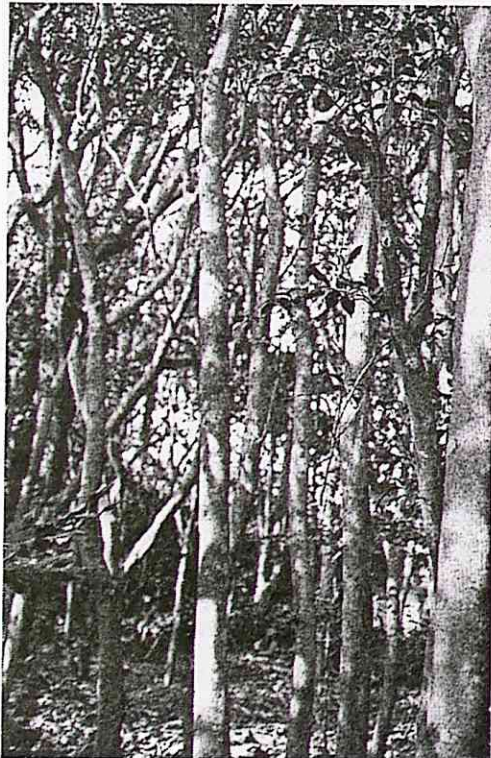


図1 田切須のヤブツバキ林 1992.4

として群生する。これが自然林であり、ふるさとの森である。あと50年後、100年後、この岬で「どこへいってもいくらでもあるのが椿」といいたい。

「村はこれからどうやっていけばよいのか。何を作り何を売ればよいのか。それは佐渡の国、その地域の風土にあうものを作るべきだと思う。赤泊だったらカヤの木を育てたらよい。3000本の樹林ができれば、その林を見に人々がやってくるだろう。その木で碁盤などの細工物をつくれればよい。きっと高く売れるにちがいない。小木半島のどこかに2000本か3000本の椿林ができれば、よその人が花見におとずれるだろう。100万人がおとずれる水戸の梅だって2700本しかないのだ。」田中圭一氏の提言である。

#### 文 献

- 1、伊藤邦男（1978）西三川のヤブツバキ林・第2回自然環境保全基礎調査・特定植物群落調査報告書（新潟県）・環境庁
  - 2、伊藤邦男（1990）町の木ツバキ・ヤブツバキ・南佐渡小木の花、名木、巨木、美林・佐渡国・小木民俗博物館
  - 3、伊藤邦男（1992）ツバキの島 田切須のヤブツバキ林・佐渡花の風土記・佐渡植物刊行会
  - 4、伊藤邦男（1993）田切須のヤブツバキ林・続・新潟のすぐれた自然・新潟県自然環境保全資料策定調査書（植物編）・新潟県
- いとうくにお（新潟県自然環境保全審議会専門調査員）  
現住所 〒952-12 新潟県佐渡郡金井町千種106-3



図2 ヤブツバキの大樹  
（胸高直径75cm, 推定樹齢750年）1992.4